

「螢狩」という語が使われはじめた時期とその後の展開について

後藤 好正

〒 223-0057 神奈川県横浜市新羽町 675-202

About the time when a word “Hotaru-gari” began to be use and subsequent deployment

Yoshimasa GOTO

Nippacho 675-202, Yokohama, Kanagawa Prefecture, 223-0057 Japan

Abstract : Hotaru-gari is a word with two meanings, catching fireflies and seeing fireflies. The word had not existed before the Edo era. It is considered having been used for the first time in the haikai in the second half of the 17th century. It was used more often in the haikai in the early 18th century. It came to be widely used in the haikai, comic tanka, meisho-zue (famous-place picture collection), ukiyoe, etc. from Kyoho to Bunka-Bunsei of a Edo era.

Key words : Hotaru-gari, word, used for the first, use example, Edo era

キーワード: 螢狩, 言葉, 初出, 使用例, 江戸時代

はじめに

螢狩は①螢を捕らえる遊び, ②螢を眺めて楽しむ行為のふたつの意味を持つ言葉である。国語辞典では①の意味だけをあげるものがほとんどであるが, ホタルの減少と自然保護思想の高まりにともなって捕獲行為が制約されるようになると, 主に②の意味で使われることが多くなった。昆虫を捕獲する遊びでは「○○ 捕り」と称することが一般的だが, トンボに「釣り」が使われるように螢狩も特殊な用例である。千葉徳爾氏によると, 「狩り」という語は本来はより狭義に特定の野獣のみに対して用いられたらしく, 『狩詞記』(多賀高忠著, 寛正5年〈1464〉)では鹿に限って用いられており, また, 南西諸島で猪を捕らえることをカリと呼んでいるのが中世のなごりという。その意味が拡張され小獣や野鳥などを追い捕らえる一般的な狩りの意味になり, さらには桜花や紅葉を觀賞することにまで拡大していくが, これは大型野獣を捕獲しなくなった貴族文人たちの用法とする(千葉, 2007)。山野を遊歩し, 桜花や紅葉を觀賞することを「桜狩」「紅葉狩」と呼ぶが, 小沢博也氏は桜狩・紅葉狩も本来はただ眺めるだけでなく, 枝を手折って来ることから狩の字が当てられたとしており(小沢, 1972), 螢狩もこれらと同系統の言葉として捉えることができよう。では「螢狩」という言葉はいつ頃から使われるようになったのだろうか, 桜狩・紅葉狩と比較しながら使用が始まった時期を探り, あわせてその後の展開をみてみたい。

なお, 引用作品中の踊り字(く)についてはへと表記した。

江戸時代以前

奈良時代に螢という文字が文献に現れるのは三点だけである。すなわち『日本書紀』卷二神代下の国議

り神話で葦原中国の様子を描写した

然彼地多有螢火光神及蠅声邪神「然れども彼の地に、多に螢火なす光る神、及び蠅声なす邪神有り」
(小学館『新編日本古典文学全集』第2巻)、

『万葉集』巻第十三挽歌に枕詞として使用された

…玉梓之 使之云者 螢成 髣髴聞而 大土乎… (3344)「…玉梓の 使ひの言へば 螢なす
ほのかに聞きて 大地を…」(小学館『日本古典文学全集』第4巻)、

現存最古の漢詩集『懷風藻』の丹墀真人広成「五言述懷」の中国東晋の車胤と孫康の螢雪の故事をふまえた
少無螢雪志. 長無錦綺工. 適逢文酒會. 終而不才風.

で、いずれも実体としての螢は描写されていない。

清少納言の『枕草子』一段「春は曙」では夏の夜に飛び交うホタルの情景を趣きあるものとしているし、紫式部の『源氏物語』(小学館『日本古典文学全集』第12-17巻)には帚木の巻で光源氏が方違えに訪れた紀伊守邸の情景を「風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、螢しげく飛びまがひて、をかしきほどなり」と、また夢の浮橋の巻では「小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向ひて、紛ることなく、遣水の螢ばかりを、昔おぼゆる慰めにてながめみたまへるに」と小野の里に隠棲していた浮舟がホタルを眺める姿が描写されており、日本人がホタルを夏の景物として意識しだすのは平安時代に入ってから、それも中期頃からと考えてよいと思う。したがって螢狩の語が現れるのはこの時代以降のこととなる。

遣唐使の廃止と国風文化の隆盛により中古から中世を代表する文学となった和歌には、『新編国歌大観』所収の室町時代までの勅撰二代集はもとより、私撰集、私家集、歌合などいずれにも螢狩と詠んだ歌は見あたらない。

桜狩は寛正(1004-12年)の初め頃に成った三番目の勅撰和歌集『拾遺和歌集』に

さくらがり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の影にかくれむ よみ人しらず
があり、紅葉狩も『夫木和歌集』に

しぐれゆくかた野の原のもみちがりたのむかげなくふくあらしかな 俊頼朝臣
が載る。『夫木和歌集』は鎌倉時代の延慶3年(1310)頃、遠江(静岡県西部)の豪族勝田(勝間田)長清の撰になるものだが、作者は『金葉和歌集』(天治元年(1124)~大治元年(1126)成立)を撰した源俊頼であり、桜狩も紅葉狩も平安時代には使われていたことがわかる。

室町時代後期になると、多くのポルトガル人宣教師が日本を訪れるようになる。彼らは話し言葉を中心に約32,000語を収録した日本語ポルトガル語辞典『日葡辞書』(慶長8年(1603)に本編、翌年に補遺が刊行)を作成するが、これは当時の日本語やその発音を知るのに貴重な文献となっている。この中で桜狩・紅葉狩はそれぞれ見出語として立てられ、

Sacuragari サクラガリ(桜狩) 詩歌語。花ざかりの桜の木を見ながら歩き回ること。

Momigigari モミジガリ(紅葉狩) 気晴らしに、上述〔筆者注、紅葉 Momigi 秋、木についたままで赤色〔になる古い葉〕の紅葉を見に行くこと。

と解説されている(土井忠生他訳『邦訳日葡辞書』)。ところが螢については Fotarui ホタル(螢)、Fotarubi ホタルビ(螢火)は見られるが螢狩はない。『日葡辞書』は雅語や卑語なども取り上げられ、桜狩には詩歌語と解説されていることから、螢狩が特殊な用例だから収録されなかったとは考えられず、中世の終わりまで螢狩という言葉は無かったと推定される。

江戸時代前期

和歌から派生した連歌は、室町時代に式目が定められ文芸性を高めていくが、一方では表現を滑稽・酒

脱にした俳諧連歌も作られた。俳諧連歌は江戸時代になると広く庶民の間に普及し、この時代の代表的な文学となり、俳諧連歌の略称である俳諧と呼ばれた。そこで、まず俳諧を手掛かりに見ていきたい。

俳諧の主流は連句形式であり、発句(五・七・五)から短句(七・七)と長句(五・七・五)をつなげてゆく。後ろに付けられる句を前句といい、前句に付ける付句を作ることを付合と呼ぶ。また、前句と付句を関連づける契機となる語句を付合あるいは付合語という。正保2年(1645)に刊行された京都の俳人、松江重頼の俳諧書『毛吹草』では巻第三を「付合」とし付合語にあてている。この中で「狩」には、「鼠、紅葉、櫻、茸、川、妹、盗人、公家、武家」があげられているが螢は見られず、螢は「燈」の付合として載るだけで独立した見出しも設けられていない。延宝4年(1676)に刊行された高瀬梅盛の俳諧付合語集『類船集』は、見出語や付合語が先行書に比して極めて多いが、見出語「狩」には「紅葉、桜、鹿、鼠、松茸、雉子、夏川、将束、富士、春日野、交野、宇多野、奥野」を載せるものの螢は見られない。また見出語「螢」には「庭の若竹、夏草、五月雨、沢水、雨夜の窓、池のうき草、月遅き夜、納涼、学ひの袖、川瀬、しけるあしべ、夕殿、草朽る、薄物、燕の巢、鷹、蓬が袖、源氏の巻、衣川、宇治、勢田、あしやの里、野寺、車のうち、大井川、かさみの袖、難波江、玉かつら」をあげているだけである。したがって、この頃はまだ螢狩の語は使われていなかったと考えてよいのではないだろうか。

俳諧では連句形式とともに、発句のみも独立した表現として詠まれた。江戸時代前期の俳諧書の発句を調べていくと、『談林功用群鑑』(延宝7年の刊行と推定)に「螢狩」が使われた句が見つかった。『談林功用群鑑』は江戸談林の中心人物であった田代松意の手によるもので、上巻に俳論、下巻に一派の四季発句、及び松意一座の神祇・釈教・恋・無常・述懐の各歌仙を納めている。その下巻「四季発句夏螢」にとられた句に

たばこ数寄末野ゝ原や螢狩 松翁

があるが、これが今のところ筆者の知る螢狩が使用された最も早い例である。

俳諧発句ではさらに、貞享2年(1685)に刊行された『俳諧白根嶽』(調實編)に

蕨来い河原が暮の 軒 狩 調實

が、貞享3年に刊行された『俳諧庵櫻』(西吟編)に

罪なくて國くらからぬ螢狩り 梅虎

が見られる。

その後、元禄8年(1695)頃に刊行されたと推定されている堀江林鴻の浮世草子『好色産毛』巻三「物いふ新仏」に京の上賀茂の螢狩が描かれ、「螢狩」が使用されている。少し長くなるが引用する。

聲も涼しき夏陰や、森の若葉に五月やミ、鳴音涼しき蟬の小川を打わたり、上鳴の螢狩、宇治瀬田は更之、北野平野に勝て、市原二の瀬の柴口鼻が歸る夜道をかゝやかし、流木の森をつゝミ、鳴か螢の川瀬の音。ある夜、「ひとりねがちに、まどろむ夜なきぞかなしきけれ」と、いでとおもひ立、此所にきてミれば、競馬の馬場さき、並木の松のかたほとり、おもひへの螢狩。あるひは御所染の夏姿に、えならぬ香ひをとときめかせ、巻樽敷をならべ、そこら呑ちらしたる毛氈のうへに人もなし。ちまたに出て螢よぶ聲、朱の鳥井のほとりには乗すてたる駕に、たぐひなき蒲團敷ならべ、六尺も守らねど、ふとんひとつ盗んで行るもなし。「聲はせで身をのミこがす螢こそ」など口ずさびて、古哥を題にてうたよむ所もあり。見廻りて堤のうへにいづれば、墨染の尼獨、ちいさき敷ものうち敷て、懷樽に盃そへて、柚べしのざんぎ切はながミにかいつゝミ、螢を伽のひとり呑。(後略) (講談社『評釈文学叢書』第2巻)

作者の雲風子堀江林鴻は京の俳人で、著書に『俳諧京羽二重』(元禄4年刊)、『俳諧永代記返答あらむつかし』(元禄6年刊)、『俳諧口こたへ』(元禄7年刊)がある。生没年不詳で、詳しい伝記もわからないが、

後年は専ら前句付点者として立ったのではないかと推定されている。金井寅之助氏は本書の特徴を、各章の構成は冒頭に語彙の解説を置き、本文でその語彙に関係のある説話を展開する『類船集』などの俳諧付合語集に似ており、前句付点者として俳諧を志す人々に資料を提供する意図があったのではないかと、としている（『天理図書館善本叢書と書之部』第25巻「好色産毛」解題）。

ちなみに、螢狩の②の意味に相当する「螢見」については、「螢狩」より早く万治3年（1660）に刊行された『新続犬筑波集』（季吟編）に、「螢みにまかりて」の前書きが見え、作品でも

螢見は月を闇路のかへさかな 金門『玉海集追加』（寛文7年〈1667〉刊）

勢田の螢見二句

ほたる見や船頭酔ておぼつかな 芭蕉『猿蓑』（元禄4年刊）

螢見や此宵闇に舟早し 峨眉『其雪影』（明和9年〈1772〉刊）

螢見や遊び過ての俄事 雉啄『葛三句集』（文政2年〈1819〉刊）

など江戸時代を通じて使用されている。

江戸時代中期以降

17世紀後期から使われ始めた「螢狩」という言葉が、その後どのように展開し、一般化していったのかを文学、名所図絵、浮世絵から概観してみたい。

【俳諧】

水間沾徳は享保3年（1718）に成った俳諧書『沾徳随筆』（臨川書店『俳書叢書』第4巻）に、

一 螢狩などいふ好がたき詞なり

桜狩紅葉狩茸狩鷹狩川狩などの外追鳥狩などいひつけたる初鳥狩此類申来る

と書き記している。沾徳は江戸の俳人で、貞享4年に立机したが、芭蕉とも親交を持ち、元禄7年に芭蕉が没すると宝井其角とともに江戸俳諧の中心となった人物である。沾徳が何故「螢狩」を「好がたき詞」としたのかはわからないが、其角歿後は江戸俳壇の大宗匠と仰がれた沾徳は、門人等の句にこの言葉をたびたび目にする機会があったのではないだろうか。17世紀末から18世紀初頭になると俳諧において、螢狩がかなり使われるようになっていたと推定される。事実、17世紀後期には俳人富尾似船（前出堀江林鴻は似船の弟子）の著した名所案内と俳諧の書『堀河之水』巻二（元禄7年刊）に

夜やふかき友まどはせる螢狩 和洲

すきものと人はいふなり螢狩 一通子

が載るし、

螢かり卒塔婆ふみ出す茂ミ哉 井蛙『俳諧蘆分船』（元禄7年成）

月花の後道なり螢狩 花蝶『小弓俳諧集』（元禄12年刊）

の句もある。また、『沾徳随筆』より少し後になるが、享保20年刊行の『俳諧友あぐら』（沾州編）には

ほたるがり人こそしらね滝野川 陶宇

飲む酒も門田あればぞ螢狩 止隅

の二句がとられている。

その後俳諧では

夜か明けて骨折見えす螢かり 也有『蘿葉集』（明和4年跋）

*この句は享保19年の『俳諧木の本』に所収という（名古屋市蓬左文庫（1982）による）。
大將は負れて出るや螢狩 也有 同

螢狩や骨も折らせす草の中 鳳宇『俳諧恒之誠』(安永3年〈1774〉序)
扇にて逆櫓たてはや螢狩 沾峨『吐屑庵句集』(安永5年)
うき舟や瘡やおさへてほたる狩 几董『井華集』(寛政元年〈1789〉刊)
狐火も見たかる連や螢狩 太無『太無発句集』(寛政2年序跋)

*『太無発句集』にはこの他にも螢狩を詠んだ句が収められている。
草の中に我もこもれり螢狩 琴之『新類題発句集』(寛政5年刊)
宵闇や扇ひらめく螢狩 如酒 同
抓む気のなくも老けり螢狩 嘯山『葎亭句集』(享和元年〈1801〉刊)
奥のしれた水の音也ほたる狩 道彦『続蕙本集』(天保9年〈1838〉刊)

などの多くの句が作られた。

俳諧の付合から生まれた前句付・冠付などの雑俳や前句付の付句が独立した川柳では、元禄期に

○前句 汗ぬぐはすは松の葉嵐

魁を禿たまはる軒狩 『若みどり』(元禄4年序)

○前句 片肌ぬぎし心すゝしき

螢狩時は御公家の位を忘れ 『奈良土産』(元禄7年刊)

○前句 手に取様でとられるのは何

扇さへ樹に破らるゝほたる狩 『冠附もみじ笠』(元禄15年刊)

の句が見える。さらに、江戸時代中期から後期には

一つでも義理の届た螢狩 『俳諧武玉川』初篇(寛延3年〈1750〉刊)

螢狩皆とつときの貞(顔)斗 『俳諧武玉川』八篇(宝暦5年〈1755〉刊)

螢狩案じ初めは貧学者 『俳風柳多留』三五篇(文化3年〈1806〉刊)

茶にうかされて旅人も螢狩 『俳風柳多留』四八篇(文化6年刊)

螢狩團扇の反古に虫押へ 『俳風柳多留』九八篇(文政11年刊)

子の闇に天窓の光る螢狩 『俳風柳多留』一二五篇(天保4年刊)

などの句がある。

【和歌・狂歌】

今のところ螢狩の使用例を確認できない漢詩を除き、詩歌の中で螢狩の使用がもっとも遅かったのが和歌である。『新編国歌大観』『近世和歌撰集集成』の私家集、私撰集にはその用例は見いだせず、筆者が知る限りでは、江戸時代末期に至りようやく国学者、大國隆正の次の歌が見られる。

螢がりをとめさびする少女子が袂のたまと飛ぶほたるかな 『真爾園翁歌集』

和歌とおなじ五七五七七で詠む狂歌は、歌会などで詠み捨てにされていたが、江戸時代になると庶民にも広がった。その狂歌には天明頃から「螢狩」が使われた歌が見られるようになる。

宵へにいく田のもりの螢狩うち落したは童にて 桂花亭錦月

『きやうか圓』(天明2年〈1782〉刊)

宇治そこも船の梶はらいそかせてまつさきかけて螢狩する 野春正明

『狂歌すまひ草』(天明4年刊)

これも又袋へつめるほたる狩気をほうし茶の宇治のあけほの 口上返状

『狂歌太郎殿犬百首』(寛政5年刊)

今も又牧(巻)狩ならぬ螢狩ふしのすそ野に草をわけ行 近藤素文 『狂歌芦分船』(寛政7年刊)

螢狩陳(陣)ありし宇治川にひかるかけ季飛ふは高綱 酒吞真似成 『狂歌東西集』(寛政10年刊)

螢狩おさえそこねてたつ跡を人のにこせる浅沢の水 鈴成 『狂歌関東百題集』(文化10年刊)
こゝてひとりあそこてひとり飛へによむ程もなき螢狩かな 松果亭羅文

『狂歌後三栗集』(文化11年刊)
うちむれて飛火のかけもあをによしなら團もて螢かりせん 桂影

『狂歌新後三栗集』(文政2年刊)
卯の花の雪見る宇治の川の辺にひをとらんとて出る螢かり 蝶那言澄兼

『狂歌四季人物』(安政2年〈1855〉刊)

また、京都狂歌壇の実力者、麦里坊貞也は月並会の詠題に「婦人螢狩」を出したことが、狂歌集『和哥夷』(貞也撰の月並会の一丁摺りを集めた狂歌集、享和3年序)に見られる。さらに、紀真顔は『芦荻集』(文化13年刊)の狂歌二首の詞書に螢狩を使っている。

扇のゑにほたる狩したる所

都人はたためせとて里の子がしり追あるく瀬田や石山

辰斎がかける螢狩のかたに真顔に歌こひければ

追いかくる妹がもすそにつと入て又追かへす螢をかしや

【小説】

山田案山子(近松徳三の別号)が竹本重太夫のために、講師師司馬^{しそ}芝^{あさ}叟の長話「舞」をもとに浄瑠璃「朝顔日記」を書くが、これは上演されずに終わった。雨香園柳浪(馬田昌調)は徳三の遺稿をもとに読本『朝顔日記』を文化8年に刊行した。この作品は主人公の宮城阿蘇次郎と深雪の出会いの場として宇治の螢狩が使われている。

…都會^{みやこ}の人^{ひと}情^{ごころ}京浪花^{きやうなには}の人はこれを見んと^{おのがまにまにさけさかな} 随意^{おのづか} 酒香^{さけ}を具へて樓船^{やかたぶね}はさらなり漁船^{いさりぶね}をさへしつらひて
宇治橋^{うぢはし}のわたりは所せきまで棹^{さし}よして螢狩^{せう}をぞ競いける (吉川弘文館『朝顔日記』)

読本版『朝顔日記』は好評を博し、さらに歌舞伎狂言や人形浄瑠璃への改作が行われた。今日では『生写朝顔日記』『生写朝顔話』の外題で歌舞伎や浄瑠璃で演じられている。

また、源頼政の子孫という設定の生駒左右衛門を主人公とする五島清通の読本『螢狩宇治奇聞』(文化10年刊)でも、生駒左右衛門が見出される場面に宇治の螢狩が用いられている。

…洛陽^{みやこ}、浪華津^{なにはづ}はいふもさらなり、近国の豪族^{きよみん}、巨民^{きよみん}あるいは風流文雅^{ふうりうぶんが}の輩^{ともがら}など、年ごとに四月より六、七月の頃までは螢狩と号^{なづけ}つつ、この地へ来遊し、詩を賦し、歌を詠じなどすること、幾千万人といふ数^{かず}を知らず。(尾道大学近世文学原典講読ゼミ『翻刻 [螢/狩] 宇治奇聞』)

【名所図絵】

江戸時代後期には、現在の観光ガイドのような絵入りの名所図絵が多数刊行される。特に京の俳人秋里籬島は畿内を中心にいくつもの名所図絵を著したが、そのうち『都名所図絵』(安永9年刊)巻之五目録に「螢狩(宇治)」、『摂津名所図絵』(寛政9年刊)巻之五の図に「白井螢狩」、『東海道名所図絵』(寛政9年刊)巻之一の図に「石山螢狩」と螢狩の表記が見られる。

【浮世絵】

浮世絵には作品名に「螢狩」が付けられた作品があるが、ここでは作品中に螢狩を含む題が見られるも

のをいくつかあげる。溪斎英泉には「今様螢かりの図」という大判錦絵三枚続の1830年代の作品がある。また、歌川広重にも「宇治川ほたるがりの図」と付けられた団扇絵がある。歌川国貞(三代豊国)には文政2年の大判錦絵「螢狩江戸ツ子揃」という八枚組の役者絵、嘉永6年「隅田乃螢狩」という大判錦絵三枚続、嘉永7/安政元年(1855)の「見立螢狩夜光玉揃」という大判錦絵三枚続、万延元年(1860)の大判錦絵「螢狩當風俗」がある。また、二代歌川広重との共作で、大判錦絵三枚続の「山城宇治川螢狩之図」(文久元年<1861)>)がある。この他にも、歌川貞秀に大判三枚続の「東錦今様ほたるがりの図」(天保頃)、春教に色紙判錦絵「宇治螢狩」(文政頃か)、落合芳幾に大判錦絵「江戸砂子子供遊 早稲田螢がり」(万延元年)がある。

地方への広がり

天明(1781-88)から文化(1804-17)にかけて伊予俳壇の中心的存在であった松山の俳人、栗田樗堂の『樗堂俳句集』(寛政六年に企画、同年の士朗序)に

ほたる狩侍の子のひとりかな

の句がある。また、『新類題発句集』(蝶夢編)には前出の句の他に

螢狩男あり火はともすまし

の句も載る。作者は備後(広島県東部)の女性で風絮である。川柳でも文化期に出版された『古今田舎樽』(田舎坊左右兒撰、文化2年に石橋亭英子らが編纂)には

ほたるかり姉のしたくをまたるかり

ほたるかり下女殿りの無分別

の句が見える。『古今田舎樽』は信州松本で出版され、入集者も松本および周辺の人達である。

これらの句の存在は、「螢狩」という言葉が江戸時代後期までには三都のみならず広く地方でも使われていたことを窺わせる。江戸時代は中央の文化や情報が比較的早く地方に広まった時代(倉知, 2006)であるが、その要因として多様な分野でネットワークが築かれていたことが指摘できる。倉知克直氏は『江戸文化をよむ』で、教育・学習という視点から知のネットワークについて言及しているが(倉知, 2006)、他にも俳諧や狂歌などの文芸をはじめさまざまなネットワークが重なり合いながら存在していた。「螢狩」という言葉はこうしたネットワークによって地方へ伝播したと思われる。特に雑俳を含む俳諧は早くから地方へ広がりを見せており、元禄期の俳諧に使用例がいくつも見られることから、この語の伝播に大きな役割を果たしたのではないだろうか。

おわりに

「螢狩」という言葉は、江戸時代の17世紀後期から使用例が見られはじめ、18世紀の初頭には少なくとも俳諧において使用例が増え、広まっていったと推定された。江戸中期には俳諧の他にも、狂歌や名所図絵で使用が認められ、後期には読本や浮世絵の作品名でも使用された。こうした文化を通して、一般的な言葉となっていったと考えられる。また、地方への伝播には俳諧の影響が大きいと考えられた。しかし、日本の代表的な詩歌である和歌において「螢狩」の受容は遅く、江戸末期になってようやく地下歌人によって詠まれた。

参考文献

秋里籬島(1980)撰津名所図絵。日本名所風俗図絵10大阪の巻(森修編)。角川書店。

- 秋里籬島 (1981) 都名所図絵. 日本名所風俗図絵8 京都の巻Ⅱ (竹村俊則編). 角川書店.
- 秋里籬島 (1981) 東海道名所図絵. 日本名所風俗図絵17 諸国の巻Ⅱ (林英夫編). 角川書店.
- 千葉徳爾 (2007) 「狩獵」の項. 世界大百科事典 (改訂新版) 第13巻. 平凡社.
- 土井忠生他訳 (1980) 邦訳日葡辞書. 岩波書店.
- 江戸狂歌本選集刊行会編 (1998-2004) 江戸狂歌本選集第1～13巻. 東京堂出版.
- 愛媛県史編さん委員会編 (1982) 愛媛県史資料編 文学. 愛媛県.
- 藤井乙男 (1970) 好色産毛. 浮世草子名作集 評釈文学叢書第2巻. 講談社.
- 藤沢 毅編 (2012) 翻刻『[蚩/狩] 宇治奇聞』(尾道大学近世文学原典講読ゼミ翻刻). 自刊.
- 堀江林鴻 (1974) 好色産毛 (金井寅之助解題). 浮世草紙集一 (天理図書館善本叢書と和書部編集委員会編) 天理図書館善本叢書と和書部第25巻. 天理大学出版部.
- 飯田正一他校注 (1972) 談林功用群鑑. 談林俳諧集二 古典俳文学大系4. 集英社.
- 田舎坊左右兒他編 (1956) 古今田舎樽. しなの川柳社.
- 神田豊穂 (1926) 俳諧庵櫻. 俳諧白根嶽. 日本俳書大系第7巻 談林俳諧集. 日本俳書大系刊行会.
- 小島憲之校注 (1964) 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹 日本古典文学大系69. 岩波書店.
- 小島憲之他校注・訳 (1973) 萬葉集三 日本古典文学全集4. 小学館.
- 小島憲之他校注・訳 (1994) 日本書紀① 新編日本古典文学全集2. 小学館.
- 倉地克直 (2006) 江戸文化をよむ. 吉川弘文館.
- 狂歌大観刊行会編 (1983) 狂歌大観第1巻本編. 明治書院.
- 松江重頼 (1943) 毛吹草 (竹村若校訂) (岩波文庫). 岩波書店.
- 正岡子規編 (1992) 分類俳句大観5. 日本図書センター.
- 宮田正信・鈴木勝忠校注 (1971) 続蕨本集. 葛三集. 化政天保俳諧集 古典俳文学大系16. 集英社.
- 水間沾徳 (1988) 沾徳隨筆. 俳書叢書第4巻. 臨川書店.
- 紫式部 (1970-76) 源氏物語一～六 (阿部秋生他校注・訳) 日本古典文学全集12-17. 小学館.
- 名古屋市蓬左文庫編 (1982) 名古屋叢書三編第16巻 横井也有全集上. 名古屋市教育委員会.
- 西島孜哉他編 (1984-2002) 近世上方狂歌叢書1～29. 近世上方狂歌研究会.
- 野村傳四郎編 (1939) 真爾園翁歌集. 大國隆正全集第7巻. 有光社.
- 荻野清・大谷篤蔵校注 (1988) 校本芭蕉全集第2巻 発句篇 (下). 富士見書房.
- 岡田甫校注 (1998-99) 俳風柳多留全集 (新装版) 第1～12巻. 三省堂.
- 岡野知十校訂 (1898) 也有全集. 俳諧文庫第6編. 博文館.
- 尾崎紅葉校訂 (1900) 新類題發句集. 俳諧文庫第23編 俳諧類題句集後編. 博文館.
- 小沢博也 (1972) 螢と文学. みすず発行所.
- 齋藤耕子編 (2004) 新続犬筑波集. 玉海集追加. 福井県古俳書大観第5編. 福井県俳句史研究会.
- 清少納言 (1991) 枕草子 (渡辺実校注) 新日本古典文学大系25. 岩波書店.
- 「新編国歌大観」編集委員会編 (1983-1992) 新編国歌大観第1～10巻. 角川書店.
- 鈴木勝忠編 (1959) 冠付もみじ笠. 奈良土産. 未刊雑俳資料1期 (謄写版). 自刊.
- 鈴木勝忠編 (1961) 若みどり. 未刊雑俳資料11期 (謄写版). 自刊.
- 鈴木勝忠・白石悌三校注 (1970) 俳諧友あぐら. 享保俳諧集 古典俳文学大系11. 集英社.
- 松籟庵霜後編 (1790) 太無発句集. (国会図書館蔵)
- 太陽編集室 (1975) 太陽浮世絵シリーズ3 秋広重 (鈴木重三監修). 平凡社.
- 高瀬梅盛 (1676) 類船集. (早稲田大学図書館古典籍総合データベース)
- 富尾似船 (1976) 堀河之水. 名所都鳥・堀河之水・京内まわり・都名所車・都花月名所・洛陽十二社畫元記 (野間

光辰編) 新修京都叢書第五卷. 臨川書店.

鳥居清・山下一海校注(1970) 其雪影, 井華集, 葎亭句集. 中興俳諧集 古典俳文学大系 13. 集英社.

鳥取市歴史博物館編(2013) 鳥取市歴史博物館錦絵集. 鳥取市歴史博物館.

上野洋三他編(1973) 近世文藝叢刊別巻1 俳諧類舩集索引 付合語篇. 般庵野間光辰先生華甲記念会.

上野洋三編(1985-88) 近世和歌撰集集成第1～3巻. 明治書院.

雨香園柳浪(1911) 朝顔日記. 吉川弘文館.

山澤英雄校訂(1984) 俳諧武玉川一・二(岩波文庫). 岩波書店.

吉田暎二(1974) 浮世絵事典《定本》下巻. 画文堂.

※本稿脱稿後, 次の2句の存在を知った.

手にとれば草の露なり螢狩 富苗『白鳥集』(宝暦11年刊)

海老の腰も孫にのされて螢狩 緑糸『そのかげ集』(天明8年刊)

富苗は信濃(長野県)仁科の俳人で, 緑糸は福井県の俳人だそうである。「螢狩」の語の地方への伝播は, 筆者が考えていた以上に早かったようである. なお, 出典は下記による.

齋藤耕子編(1992) 福井県古俳書大観. 福井県俳句史研究会.